

【試し読み版】



7

[第 I 卷第 10 章]

10

森の奥深くで、ジンプリチウスは
いかにして書くことと読むことを
習い覚えたか

隠者が声を出して聖書を読んでいるのを初めて目にしたとき、いったいこの人は誰を相手にして、こんな秘密の対話を、しかもわたしの判断するかぎりとんでもなく真剣な話し合いをしているのか、さっぱりわけがわからなかった。見たところたしかに唇は動いているのに、話し相手はどこにもいない。字の読み方も、字を書くすべもまるで知らないわたしだったが、やがて隠者のまなざしを手がかりにして、彼がこの聖書という本のなかにある何かを相手にしていることに気がついた。わたしはこの〈本〉というものに狙いを定め、隠者がそれを脇に置くやいなや近寄って、扉を開いてみた。最初に出てきたページはヨブ記の第一章であり、その冒頭に置かれた、美しい彩色による優れた木版

画の図柄が目飛びこんできた⁽¹⁾。わたしはその絵のなかの人物たちに、いくつか珍妙な問いかけをした。しかしうんともすんとも返事がないので、じれったいことこのうえない。とうとうわたしがこんな言葉を口走ったとき、ちょうど隠者がわたしの背後から近寄ってきていた。

「おいおい、ごろつきの小びとどもめ、おまえたちには口というものがないのかい。ついさっきまで、おれの父上と——わたしは隠者をそう呼ぶように命ぜられていた——、長々しゃべりまくっていたじゃねえか。どうやら、見たところおまえたちは、おれのかわいそうな〈トトさま〉の羊たちを家まで連れて行って、それから〈トトさま〉の家に火をつけやがった、あの連中なのだ。待て、待ちやがれ。

おれがこの火を消してやる」

そう言うやいなや、わたしは水を取りに行こうとして立ち上がった。あの時と同じ危険がさし迫っているとわたしは思ったのである。

「どうした、ジンプリチウスよ」 知らぬ間に後ろに来ていた隠者は言った。

「いや、だって父上——」 わたしは答えた。「ここにも兵隊たちがいて、それで羊らを従えていて、どこかにとんずらしようとしてるんだ。こいつら、父上がちやうど話し相手になっていたこの可哀想な人から、羊を盗ったんだよ。だからこの人のおうちも、ぼうぼう燃えてる。すぐに火を消してあげなきゃ、何もかも焼けてしまうよ」

こう言いながらわたしは、自分の見ているものを隠者に指さして教えた。

「いや、ここにいなさい」、そう隠者は言った。「まだ何も危ないことは起きていないからね」

わたしは、自分の上品さのかぎりを表現して答えた。「あなたはめくらなのかい？ とにかくこいつらが羊を連れていかないように、足どめをしておいてくれよ。おれのほうは水を持ってくるからね」

「やれやれ」と隠者は言った。「これはみな〈絵〉というもので、生きたものではない。ずっと昔に起きた出来事でありありと見せてくれる、ただの作りものだよ」

わたしは答えた。「だけど父上は、前に、この人たちと

しゃべってたじゃないか。それなのに、なんで生きてないなんてことがあるんだい」

隠者としての志を守るふだんの習わしに反して、この時ばかりは、隠者も声をあげて笑わずにはいられなかった。

そして言うには、「わが子よ、この図柄たちはしゃべることはできないんだよ。でもこの者たちの行い、人となりは、この黒い線の集まりから知ることができる。これは〈字を読む〉ということなのでな、こうして字を読んでいたわたしを見て、おまえは絵と話をしていると思いきんだのだ。だがこれはみな生き物でも何でもない」

わたしは答えた。「父上、もしおれも父上と同じひとりの人間だつてことなら、この横並びの黒い線のかたまりか

ら、父上に見えているものを、おれも見えるようにならな
いとおかしいはずだよ。いったいどうすれば、父上の話し
合いに、おれも加わることができるといふ？　どうか教え
ておくれよ、どうすればこいつがわかるようになるのか」

すると隠者は言った。「よし、わが息子よ、いいだろう。
では教えよう。おまえがわたしと同じように、この人物た
ちと話をすることができるようにな。ただそれには時間が
かかる。そのあいだわたしは辛抱を、おまえは熱心さをな
くさずにおらねばならん」

このあと隠者は、白樺の木の皮にすべてのアルファベツ
ト文字を、本に印刷されたとおりのかたちで書いてくれた。
やがてわたしが一つひとつの文字を覚えおわると、今度は



それを繋げて書くことを、続いてそれを声に出して読むことを学んだ。そしてとうとう最後には、なんと隠者その人よりも上手に字を書けるようになったのである。わたしは、印刷された文字をすべてそのままそっくりに模倣して書いていたのだ。

〔訳註〕

(1) 手彩色の挿絵が入った聖書は、例えば貴族のような高い身分の人物が所有者であることを示している。

[著者紹介]

ハンス・ヤーコプ・クリストツフェル・フォン・
グリンメルスハウゼン

Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen (1622頃-1676)

ドイツ・バロック文学を代表する小説家・著述家・暦作者。ドイツ中西部ヘッセン地方の古都ゲルンハウゼンに生まれ、パン職人だった祖父のもとで育つ。三十年戦争に従軍して各地を転戦したあと、ドイツ南西部の上部ライン地方に居を定め、貴族の所領における執事、酒場の主人、町の代官としての職務をこなす生活のなかで、晩年の十年足らずのあいだに数多くの著作を執筆する。支配階層と民衆層の中間領域を生活圏として社会の緊張関係をつぶさに観察しながら、近世ヨーロッパに成立するピカロ（悪漢）小説と阿呆文学の傑作群を残したが、変名のもとに書かれた代表作『ジンプリチシムス』の著者であることが世に明らかとなったのは、ようやく19世紀中葉のことだった。当代の大ベストセラーはやがて「ジンプリチシムスもの」と呼ばれる類似作品のブームを没後においても発生させる。時代の硬軟さまざまな言説に取材しつつ、それと戯れるように形成された生氣あふれる言語表現は、後のグリム兄弟によるドイツ学の営みにとっても貴重な資料となった。

[訳者紹介]

吉田 孝夫 (よしだ・たかお)

1968年鳥取県生まれ。

奈良女子大学文学部教授。

京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了（ドイツ語学ドイツ文学専修）。博士（文学）。

著書に、『山と妖怪 ドイツ山岳伝説考』（八坂書房）、『語りべのドイツ児童文学 O・プロイスラーを読む』（かもがわ出版）、訳書に、プロイスラー『わたしの山の精霊ものがたり』、『かかしのトーマス』、『ニット帽の天使』（さ・え・ら書房）、ラーニシュ『図説 北欧神話の世界』、ホイスラー『図説 ゲルマン英雄伝説』、ザルトーリ『鐘の本』、グリム兄弟『ドイツ伝説集』（八坂書房）などがある。

ジンプリチシムス——原典訳『阿呆物語』

【試し読み版】その⑦

グリーンメルスハウゼン作

吉田孝夫訳

二〇二六年三月二十五日 発行

発行所 (株) 八坂書房

千代田区神田猿樂町一—四—十一

©2026 YOSHIDA TAKAO 無断複製・転載を禁ず

本ファイルは試読用に判型を変え再編集したものです。
総目次、ならびにその他詳細はこちらをご覧ください。

<http://www.yasakashobo.co.jp/books/detail.php?recordID=787>